“Brother Jacob” における生産と消費

池園　宏

I

“Brother Jacob”(1860)は “The Lifted Veil”(1859)と並ぶ George Eliot の短編小説であるが、その内容や作風は大きく異なっている。両者の違いや対照性は、F. B. Pinion の以下の意見に的確に示されているだろう。

> “The Lifted Veil” and “Brother Jacob” are poles apart, the one deep and dark, the other light and bordering on the farcical. If the one is a *jeu de mélancolie*, the other is a *jeu d'esprit* which may appear “ourtré” by George Eliot standards.[1]

これは、Eliotが出版者の John Blackwoodへ宛てて書いた手紙の中で、“The Lifted Veil” について “a slight story of an outré kind—not a *jeu d'esprit,* but a *jeu de mélancolie*”[2] と述べたのを受けた言葉である。確かに “Brother Jacob” は「笑劇風」で、他の Eliot 作品からは「逸脱した」「機知に富む遊び」を含んだ小説だと言える。作者自身ですら “a slight Tale”[3] “a trifle”[4] であると認めているほどで、従来顧みられることの少なかった作品である。この小説が等閑視されがちだった理由の一つとして、その作風が寓話的であり、他の Eliot 作品を特徴づけているリアリズムの要素に欠けている点が挙げられるだろう。[5] 確かにプロット展開や登場人物の心理描写は複雑とは言えず、物語の内容も寓意的教訓が前面に出されていて、とりわけ顕著な特色が見出せるわけではない。だが、近年ではこの作品に対する再評価も少しずつではあるがなされつつある。本論で着目したいのは、作品中に存在する「生産」(production) と「消費」(consumption) のモチーフに言及する Karen B. Mann の興味深い指摘である。[6] しかし残念なことに、その指摘はあくまで部分的なものに止まっており、それほど深く掘り下げた議論がなされているとは言えない。菓子作り職人(confectioner)を主人公に設定したこ

の小説には、食べ物を作ったり食べたりする行為の描写、またそれにまつわる象徴性に富んだ言説や比喩表現などが数多く見受けられる。また、単に生産された食べ物を個人が消費するというレベルに止まらす、個人を取り巻く共同体社会における生産と消費の動態も微細に描き出されている。小論では、生産と消費という視点から作品を読み解くことにより、物語の中に織り込まれた作者の思想、及び本作品の意義や位置づけを明らかにしていきたい。

II

まず最初に、この物語の二人の主要人物、主人公 David と小説タイトルにその名を冠した兄 Jacob との関係に焦点を絞って考察してみよう。両者の行動様式はまさに生産と消費の図式が当てはまる。菓子作り職人を生業とする David は自ずと生産者の役割を担っている。この小説のタイトルが当初 "Mr David Faux, Confectioner" となっていたこと、[7] また小説の最後でも本人に対して同じように "Mr David Faux, confectioner"[8]という呼び方がなされていることからも、作者が菓子作りという職種及び生産行為に特別な意味を持たせようとしていたのは明らかである。一方、"a very healthy and well-developed idiot, who consumed a dumpling about eight inches in diameter every day"(47)と称されるように、その大量「消費」ぶりが強調される Jacob には、消費者としての役割が付与されている。

このように対照的な立場にある二人のうち、生産者としての David に対する作者の評価は極めて否定的である。小説冒頭では、菓子作りを自らの職業に選んでしまう未熟な若気の過ちが、一般論の形で指摘されている — "Among the many fatalities attending the bloom of young desire, that of blindly taking to the confectionery line has not, perhaps, been sufficiently considered."(45)　続けて作者は、菓子作り職人の仕事には社会的な影響力がなく、大志を抱いた者にとって有利なものでもないという事実を断定的に述べる。こうした一般論がなされた後で David の登場となるのだが、まず最初に菓子作りという職業の限界が示された後で、それを選んだ個人の性質についての解説がなされる順序となっているのは示唆的である。David の人物像は何よりも第一に菓子作り職人であるという前提が重要なのであり、彼の人生における数々の過ちはそこに端を発しているのだ。さて、David がこの仕事を選んだ理由の一つは、彼自身が「甘党(a sweet tooth)」(46)だからである。彼の職業選択は、いわば消費者としての願望が生産者としてのそ

れに転化されたものだと解釈できよう。この小説には甘く味付けされた菓子類が多く登場する。J. S. Szirotny が指摘するように、"sweets" はその表面的な魅力とは裏腹に、"the reality of every species of evil, falseness, inferiority, or triviality" という否定的側面を暗示する。[9] 美しい外観を持つ甘い菓子は、人を魅了し欺く性質を象徴しているのである。それ故、菓子作り職人である David の名字 Faux が"false"という原義を持ち、狡猾な"Fox" (82) を連想させるのは自然なことなのだ。そしてこのことを裏書きするかのように、彼はエゴイストとしての性格を付与されている。その邪悪な性格を示す形容句として、作品中には "contrivance" "ingenuity" "guile" などの言葉が頻繁に用いられる。また、"he was a young man greatly given to calculate consequences...he calculated whether an action would harm himself, or whether it would only harm other people" (54) というように、エゴイズムを土台としたその計算高さもまた繰り返し言及されている。David は Eliot の小説に数多く登場するエゴイストの系譜に属する人物であると言える。

しかしこのような David の狡猾さや計算高さも、Jacob という白痴の前では役に立たない—"It's of no use to have foresight when you are dealing with an idiot: he is not to be calculated upon." (51) なぜ作者が白痴の登場人物を設定したのかについては緒論ある。一般的な解釈としては、"a young man of much mental activity, and, above all, gifted with a spirit of contrivance" (46) である David とは好対照をなす、伝統的な "a holy fool or innocent who unwittingly exposes the world's vices"[10] としての人物造形がなされているのだと考えられよう。だが同時に、ここで着目したいのは消費者としての Jacob 像である。David は母の金貨を盗み、その袋を掘っておいた穴に隠そうとしたところを Jacob に目撃されてしまう。その際、彼は精神薄弱な兄に対し、子供騙しのような懐柔手段として菱形ドロップ (lozenges) を与える。この菱形ドロップが David 自身の手によって作られたかものどうか明確に記されてはいない。だが、菓子作り職人（生産者）の彼がとっさの判断で兄に菓子を食べさせる（消費させる）ことによって事態を打開しようとした点は非常に意義深い。しかも、その時 David がドロップを所持していた理由は、好意を持っていた Sarah (Sally) Lunn[11] という美人の女性に取り入る手段とするためであった。すなわち、もともと彼は自己の欲望を満たす目的で他者に菓子を消費させようと目論んでいたのだ。目的こそ変わったものの、利己心から「ご機嫌取りのご馳走 (propitiatory

delicacies)」(50)を利用しようとするDavidの思惑や行動は一貫しているのである。さらに、ドロップを賞味していたJacobが金貨の存在に気づいたとき、Davidは彼を欺くために、金貨を土中に埋めればドロップに変わるという嘘をでっちあげる—"Put guineas in the hole — they'll come out like this!"(51) 一連の場面は、窃盗によって無の状態から金貨を生産したDavidが、奸計によって金貨から菓子を生産するという錬金術的ペテン行為を重ねていると解釈できるのだ。

だが、Davidの予期に反して、自らの食欲に我慢できないJacobは金貨の袋が埋められた土を先に掘り起こし、彼を落胆させる。小説冒頭において、人間の胃には菓子に対する「飽き(satiety)」(45)が生じるものだという事実が作者によって述べられているが、Jacobは文字通り飽きることを知らぬ貪欲な消費者である。この前後のJacobは、Davidを "a sort of sweet-tasted fetish"(52) "his sweet-flavoured brother"(54)とあたかも消費の対象であるかのように捉えている。また、Davidの服のポケットに砂糖キャンディの残りがあるのを発見したJacobは、"a further development of sugar-candy after a longer or shorter interval"(55)を期待し、服の縁を執拗に掴んで離さない。この "development" が生産行為を暗示する言葉なのは明らかである。Jacobは自己の消費欲を満たすために、実現しようのない他者の生産行為に期待をかけているのだ。そしてその無邪気な期待は、先に述べたDavidの錬金術的ペテン行為に端を発している。結局はDavidに振り切られてしまうものの、このように消費欲に駆られたJacobは、あたかも "David's grotesque double"[12] のごとく執拗に彼にまとわりつき、その利己的企みを阻害するのだ。

その後二人の交流は久しく途絶えるが、やがて故郷から離れた別の町グリムワースで再会し、物語は大団円を迎える。新たな町で菓子屋として成功を収め、婚約まで漕ぎ着けたDavidの店へ突如Jacobが現れ、彼を慌てふためかせる。JacobはここでもDavidの巧みな計画の裏をかくことになるのだ。Davidの動揺を後目に、空腹に耐えられなくなったJacobは店の菓子パン類を食べ始める。一旦は追い払おうとしたものの、粗野な白痴の兄との兄弟関係が暴露されれば破滅につながるため、Davidは "I don't mind giving him something to eat"(77)と逆に兄をもてなすことにする。ここで再び菱形ドロップを与えたDavidの心中には、"They'll keep him quiet a bit, at any rate"(78)という口封じの意図が働いている。この場面で以前と同じ菱形ドロップが登場するのは決して偶然ではないだろう。利己的な奸計のために菓

子を利用するという David の姿勢は、基本的にここでも変化が見られないのだ。それどころか彼は密かに、Jacob の食べるパンに砒素(arsenic)が入っていればいいのにという殺意すら感じる。そこに見られるのは、健全な食べ物のみならず、死に至る毒物をも消費させたいと考える、狂気じみた生産者の姿である。一方、Jacob にとって David の菓子店は自己の食欲を満足させてくれる "paradise"(81)に映っており、彼はてこでもその場所を動こうとしない。この事態に周囲が騒然となったとき、町の住人 Prettyman 氏は David に "he'll eat you up"(79-80)という警告を与える。この言葉は、消費者だった Jacob が生産者の David を「食いつくす」というカニバリズム的現象が生じていることを示唆している。Jacob は菓子だけでなくその作り手をも消費しようとしているのだ。ここには、強欲な生産者が飽くことを知らぬ食欲の消費者によって破滅に導かれるという構図がある。案の定、この直後に David の素性は暴露され、彼はグリムワースにおける居場所を喪失する結果となる。このように考えれば、David が町を離れることになったとき、同行する Jacob の手に "a bag of sweets"(82)が握られているというのは実に皮肉な描写だと言えよう。

III

前項では、二人の主要人物に焦点を当て、生産と消費のモチーフが両者の相互関係に組み込まれていることを考察した。だが、このモチーフは単に個人間の問題に止まらず、作品中ではさらに大きな社会的問題としての広がりを見せる。David がもたらす生産行為とそれに伴う消費のあり方には、変動する19世紀前半[13]の英国社会の姿が映し出されていると解釈できるのだ。盗んだ金を元手に海外へ渡った David は6年後に英国へ帰還し、Edward Freely という変名でグリムワースの町に菓子店を出す。グリムワースは保守的な文化や価値観の残る伝統的な英国社会の典型として提示されている。近代的な市場原理の働いていない町で、"competition"(57)というものがない。店には顔なじみの顧客があり、住人は一家が代々世話になっている店から商品を買うことが慣例となっている。とりわけ菓子作りはこの旧態依然とした土地では未知の新興商売であり、それを始めるよそ者は "a tradesman of questionable rank"(69)として偏見と疑惑の目で見られる羽目になる。だが、David はそうした不利な障害を克服し、グリムワースの住人の価値観を変え、新参者にもかかわらずその社会的影響力を強めていく。David がグ

リムワース社会において体現していたものは何なのかを、生産と消費の視点から検討してみたい。

保守的なグリムワースでDavidを最初に受け入れたのは、教区牧師夫人、医者夫人、梳毛工場主夫人らいわゆる上流階級に属する婦人たちであった。中でも梳毛工場主夫人のMrs Gateは、身分の高い親族のクリスマス訪問に備えて、ビスケット類を「大量消費(large consumption)」(60)することが見込まれた。だが、Davidが急速に勢力を拡大する契機となるのは、より身分の低い家庭の婦人たちを味方に取り込んだことによる。グリムワースでは、クリスマスに "home-cooked"(59)でない品を食卓に出すことは恥だと考えられていた。この特別な家庭料理は自前で生産することが町の常道だったのである。しかし、獣医の妻Mrs Steeneはクリスマス用のミンスパイを作ることに失敗し、夫には内緒でDavidの店から代わりの品を購入してしまう。費用を無駄にすることを恐れた夫人は、料理を自ら生産する行為を放棄し、"it would be much better to buy them ready-made"(61)と既製品を消費する道を選んでしまうのだ。このやり方は他の多くの婦人たちにも伝染し、ついには夫連中でさえも暗黙の内にその事実を許容していくことになる。この現象に対する作者のコメントを見てみよう。

> In short, the business of manufacturing the more fanciful viands was fast passing out of the hands of maids and matrons in private families, and was becoming the work of a special commercial organ.
>
> I am not ignorant that this sort of thing is called the inevitable course of civilisation, division of labour, and so forth, and that the maids and matrons may be said to have had their hands set free from cookery to add to the wealth of society in some other way. (62)

「生産」の仕事は家庭を離れて「特定の商業組織」の業務と化す。これは「文明化」に伴う「労働の分業」と呼ばれる概念であり、それによって空きのできた働き手は別の手段で「社会の富」に資することとなる。これはまさに産業革命以降に台頭した近代資本主義の考え方である。Peter Allan Daleが指摘するように、Davidは "a 'type' or representative of the gospel according to utilitarianism and the laissez-faire economics that derive from it" であり、Jeremy BenthamやAdam Smithの思想を具現化した人

物なのだ。[14]「労働の分業」は Adam Smith の『国富論』(*The Wealth of Nations*) によって一般に流布するようなった言葉であり、[15] 上記引用中の「社会の富」はこの高名な書物のタイトルを想起させるものだ。また、先述した "a young man greatly given to calculate consequences" という David の計算高い人物像は、Jeremy Bentham の "felicific calculus" (幸福計算) の概念を思い起こさせる。[16] 変名 Freely は "a generous-sounding name" (59) だが、実際に彼の内に潜んでいるのは "the desire for sweets and pastry must only be satisfied in a direct ratio with the power of paying for them" (59) という合理的経済観念である。グリムワースにおける David は、功利主義思想に裏打ちされた近代資本主義の体現者なのである。だが、小説中では彼の行動がグリムワースに良い影響をもたらすようには決して描かれない。クリスマス料理作りが家庭から離れていく現象は、"corruption" (60) "downward course" (61) "infection" (61) "perversion" (61) "demoralisation" (62) というように、一様にネガティブな言葉で表現されている。また、「労働の分業」によって空きのできた女性たちが現実には「社会の富」に資することなどなく、それどころか結果的には男性の貧窮化や女性の井戸端会議的怠惰、そして David の繁栄を顕在化させたに過ぎないのだ、という事実が鋭く指摘される。新興商売を営むいわゆる19世紀的成り上がり者 (upstart) である David のみが、大量発注、大量生産による富を独占するのだ。このように、近代的生産形態を獲得する過程で古くからの共同体の仕組みや価値観を失って「堕落」していくグリムワースの状況は、諧謔味を帯びつつも否定的な様相で描き出される。そして、道徳的資質に欠け、伝統的な英国社会の秩序や規範を破壊していく David は、作者による鋭い批判の対象となっているのである。

社会的に成功を収めた David が結婚相手を求めるプロセスを考察してみよう。彼は自分に相応しい相手として、グリムワースのような "low parish" (66) の中では比較的良家である Palfrey 家の娘 Penny に魅了される。David の求愛が愛情によるものではなく野心から出たものであること、またその野心が先述した商業資本家としての発想の延長上にあることは、以下のコメントにより明らかである。

> His views in marriage were not entirely sentimental, but were as duly mingled with considerations of what would be advantageous to a man in his position, as if he had had a very large amount of

money spent on his education. (69)

David は "respectable family"(82) である Palfrey 家と縁続きとなることにより、自己の地位を向上させようと試みる。いわば、かつて窃盗により無の状態から金貨を生産したのと同様に、よそ者という無の存在から野心によって高位の身分を自己生産しようとしているのだ。彼にとって妻が所有財産に過ぎないものであることは、Penny というネーミングが文字通りお金を意味することにも暗示されている。[17] また、David が Penny の美しさを表現するのに用いる "comparable to the loveliest things in confectionery"(67) という言葉は、彼が相手を消費可能な一商品と同等に見なしていることの表れと解釈できよう。これと呼応するかのように、Penny の結婚を憂慮する姉の Letitia は、妹がまるで食べ物のように David に食いつぶされ消費されていくことを嘆くのだ — "She certainly did look like a fresh white-heart cherry going to be bitten off the stem by that lipless mouth." (76) David にとっての Penny は、先に述べた菓子と同じ名前を持つ Sally Lunn とともに "consumable objects"[18]なのである。

だが、このような結婚の企ては、最終的には Jacob の出現によって挫折させられる。一見グリムワース社会との関わりは薄いように思えるが、Jacob は変動していく社会状況に一石を投じる役割を果たしていると解釈できる。それは単に、David の正体を暴露するという表面的な事柄ばかりではない。Jacob の外観の描写に着目してみよう。David の店に現われた際の彼は、以前と同じく、農夫の野良着(smock-frock)を着用し、手には干し草用の熊手(pitchfork)を所持している。その風体はまさに "a British yeoman" (45)の息子に相応しい。干し草用の熊手は、"it was David's guilt which made these prongs formidable"(49) というように、罪を犯した David に恐怖心を植えつける役割を以前から持っていた。だが同時に、それは田園に働く牧歌的農耕者の姿を想起させるものであり、この意味で Jacob は近代資本主義以前の伝統的な英国社会を象徴しているとの解釈が可能である。かつてと変わらぬ彼の素朴な外見は、以前とは様変わりしてしまった新興事業者 David のそれとは対照的である。David の華麗な転身ぶりは、オランダ画家を涙に誘うような、またターナーの絵を思わせるようなと描写される彼の菓子店のきらびやかな外観 "a blaze of light and colour"(58)によく表れている。突如そこへ現われた Jacob は、再会の挨拶もそこそこに店先のパイを頬張り始める。彼は近代的資本家 David を文字通り「食いつくす」こ

とにより、David が「食いつくす」過程にあったグリムワース社会を救う役割を果たすのだ。それ以降、グリムワースの住人は誰も David の商売にお金を出さなくなり、彼は店の立ち退きを余儀なくされる。彼は消費者から背を向けられ、自らの生産の場を奪われてしまう結果となるのだ。David が去った後、Steene 夫人は再び家庭料理を作り出し、夫はそれを満足げに賞味するという後日談が語られる。グリムワースでは昔ながらの家庭内自給自足生産が復活し、社会の「堕落」には歯止めがかかるのである。

Ⅳ

この小説における生産と消費を巡る社会的問題は、英国内部のみに止まらず海外へも波及する。ここで言う海外とは特に英国領の植民地だった西インド諸島(West Indies)を意味する。作品中において西インド諸島、とりわけジャマイカは、金貨を盗んだ David が向かった逃亡先として重要な意味を持つ。植民地における、あるいは植民地と英国との間に存在する生産と消費の問題はどのように提示されているのだろうか。

窃盗計画を考えつく以前から、David には外国の地に対する漠然とした憧れや幻想があった。それが多分に人種差別的、帝国主義的発想に基づくものであることは、“Inkle and Yarico” の物語に対する彼の反応により明らかである。この物語は Richard Steele が *The Spectator* 紙上に発表したことで有名になったものである。ロンドンの商人 Thomas Inkle は富を築くために西インド諸島に出向くが、途中立ち寄った島で原住民に襲われ、仲間の乗組員は殺されてしまう。彼は美貌の原住民 Princess Yarico に救われるものの、結局はその行為を裏切り、英属領だったバルバドス島で彼女を奴隷として売ってしまう。Yarico は既に彼の子を身籠もっている事実を訴えるが、非道にも Inkle は彼女の売値をつり上げる手段としてそれを利用する。注目したいのは、David がこの残酷な Inkle に対して同情し、さらには彼の物語を自らの未来を重ね合わせている点である。

> Such a striking young man as he would be sure to be well received in the West Indies: in foreign countries there are always openings —even for cats. It was probable that some Princess Yarico would want him to marry her, and make him presents of very large jewels beforehand; after which, he needn’t marry her unless he liked. (53)

このような身勝手な幻想の背後にあるのは、“the broad and easily recognisable merit of whiteness”(47)に何の疑いも持たず、黒人ばかりが住む国は自分にとって最も好都合だと考える人種的偏見である。それが西インド諸島という英国属領と結びつくとき、この小説には帝国主義的な植民地搾取や奴隷制という当時の実態が投影されていることが分かるのだ。18世紀以来 “the historical symbolism of a foundational commodity of the British Empire”[19]であった砂糖が西インド諸島における主要生産物の一つであることを考えると、菓子作り職人の David がそこに赴く決意をするのには必然的な意味がある。菓子の生産は砂糖の供給がなければ成立しえない事業なのだ。もちろん、Yarico のような女性との出会いを通して一攫千金を夢見ていた David は、最初から菓子作りで身を立てる意向があったわけではない。現地の黒人たちから期待していたほど優遇されなかったため、彼の甘い夢はもろくも崩れ去り、結局菓子作りに着手せざるをえなかったのだ。この挫折には帝国主義に対する作者の批判が込められていると解釈することができるだろう。だが、思い描いていた成功こそ収められなかったものの、植民地で菓子を売って得た金が、その後本国における開業資金として少なからず寄与したことは明らかである。また、表立って記述されてはいないが、グリムワースで消費される菓子には、西インド諸島における奴隷労働によって生産、輸入された砂糖が使用されているのだという事実も見過ごすことはできない。[20]

本国に帰りグリムワースで再び菓子店を開いた David が、しばしば西インド諸島の話題に言及する点は注目に値する。話の中には大袈裟なものや嘘で塗り固められたものもあるが、西インド諸島で十分に得られなかった成功を本国で成し遂げるため、David は自らの過去を偽ることをも厭わない。それが功を奏した結果、彼は周囲の信頼を次第に勝ち取り、店は繁盛を遂げていく。いわば、西インド諸島の存在が間接的にグリムワースの消費活動を促進する結果となっているのだ。町の人々が David の話に魅了される様子を見てみよう。彼を最初に受け入れた牧師夫人 Mrs Chaloner は、西インド諸島にある彼女の祖父の地所を見たことがあるという共通の話題に惹かれる。町の女たち “Grimworth Desdemonas”(63)は、David の語る異国の冒険談に胸をときめかせる。David は町の “the Oyster Club”で、自分が経験したサルタン（イスラム教国君主）のような放縦の暮らしについて吹聴し、周囲を強く印象づける。David を気に入っている Penny は、西インド諸島に滞在して海での経験が豊かな彼を、Robinson Crusoe や Captain Cook といっ

た著名な冒険家と同列に見立てている。また、Palfrey 氏が渋っていた娘の結婚を承諾するきっかけとなったのは、遺産贈与の取り決めをしている叔父が西インド諸島にいるという David の作り話を信じたためである。グリムワースの住人の西インド諸島に対する見方は多分に帝国主義的なものであると言えよう。Chaloner 夫人の祖父の地所や David の叔父の遺産は植民下の大農園経営を、サルタンばりの放縦な暮らしぶりは支配階級の持つ権力や原住民との主従関係を示唆する。Desdemona が Shakespeare の悲劇 *Othello* においてムーア人と結婚した女性であること、また Robinson Crusoe や Captain Cook の冒険が帝国主義性を内包していることは言うまでもないだろう。ここで重要なのは、Nancy Henry が指摘するように、町の人々が西インド諸島について持つ知識は書物から採られたものであり、安易に欺かれる形で様々な東洋的イメージを作り上げてしまう傾向があるという点である。このため、異国では失敗者である David の作り話が、知識に乏しい本国の人々には正しいものと認識されてしまうのだ。[21] ここには、当時の英国一般庶民にとって植民地の西インド諸島が遠い世界の話であり、様々な幻想の上にその虚像が成り立っているという事実に対する作者の揶揄が読み取れる。グリムワースの住人は、David の作った菓子と同様に、彼の作り話を貪欲に "consume" するのである。[22]

だが、その作り話は最終的には暴露され、植民地生産を土台に成り立っていた David の商売は崩壊する。Eliot は Jacob という媒体を用いて David を零落させることにより、彼の体現する帝国主義的思想を批判しているのだと解釈できる。このように考えると、Jacob が彼を「食いつくす」ことを警告した前述 Prettyman 氏の存在は、別の意味で興味深い。David が町の住人に受け入れられていく中、Prettyman 氏は菓子作り職人が西インド諸島にいた理由をしきりに訝るのだ。"When folks go so far off, it's because they've got little credit nearer home — that's my opinion" (64) と真相を突く主張をしていた彼は、David の正体が暴露されると、当然のごとく大得意になる。だがその彼も、David のもたらす悪影響について "Grimworth would have people coming from Botany Bay to settle in it, if things went on in this way" (81) という考えを示すことで、やはり他の住人と同じく傲慢な帝国主義的姿勢を曝け出してしまう。ボタニー湾は、1770年にオーストラリアを訪れた Captain Cook が最初に上陸した場所で、1787年には最初の英国流刑植民地として選定されている。David の話を鵜呑みにしなかった賢者 Prettyman 氏も、帝国植民地に対する認識という意味においては他の住人と

大差はないことになる。Eliot は大英帝国のコロニアリズムについて言及することの少ない作家である。この作品においても、西インド諸島における David の実際の生活ぶりが具体的に詳述されているわけではない。だが、砂糖の生産の役割を担った植民地とそれを消費する本国英国との関係が、David という "a wily would-be imperial entrepreneur"[23] の動向を中心として、作品世界の中へ無理なく織り込まれているのは注目に値しよう。

V

以上議論してきたように、この作品には生産と消費のテーマが様々な意味合いで張り巡らされている。そのスケールは個人から英国社会へ、英国社会から国際舞台へと広がる重層的なものであり、かつこれらは相互に連動し、有機的にプロット中に融合されている。作者は小説の最後で、David と Jacob の物語には "an admirable instance of the unexpected forms in which the great Nemesis hides herself"(83) が見られると述べる。ここで言う「因果応報の神」とは直接的には Jacob を指し、白痴の彼が「予期せぬ形」で奸智に長けた David を挫折させたプロットを要約するものとなっている。本論のテーマに沿って考えれば、この物語は David の体現する近代的な資本主義や帝国主義が「予期せぬ形」で挫折を味わう枠組みとなっていると言えよう。だが、実際の英国社会では資本主義や帝国主義がその勢いを緩めることはありえない。その現実を作者が明確に認識していることは、リアリズムに貫かれた他の小説群に目を向ければ明らかであろう。この作品はその寓話的性格のため、あるいは短編小説という物理的制限のため、安易な勧善懲悪の物語に終わっているのであろうか。Sally Shuttleworth は、この寓意的小説ではリアリズム小説と違って登場人物の発展や変化に関心が払われていないため、道徳的成長も自己認識も見られない David は、必ずや別の町でまた新たな復活を無駄に試みるだろうと主張する。[24] 確かに、小説中には "In a few months the shop in the market-place was again to let, and Mr David Faux, *alias* Mr Edward Freely, had gone — nobody at Grimworth knew whither"(83) という後日談が簡潔に記されているだけで、David が自己覚醒に至ったという示唆はどこにもなされてはいない。西インド諸島に赴いても、再び英国に戻ってきてからも、彼が当初と変わらぬ菓子作りに着手していることを考え合わせれば、その復活がやはり同じ商売を土台にしたものになろうことは想像に難くない。人間はいかに環境を変えよう

と、その内面性が変わらない限り自分の仕事を変えることもないという事実を、作者は以下のように指摘している。

> Since, as we know, men change their skies and see new constellations without changing their souls, it will follow sometimes that they don't change their business under those novel circumstances. (72)

すなわち、道徳的成長のない David はやはり菓子作りを続け、生産と消費のサイクルを惰性的に繰り返して生きていくことになる。資本主義や帝国主義は依然として存在し続けるのである。この作品は寓意小説風だが、その現実認識の姿勢はそれほど平板でも楽観的なものでもないと言えよう。そこには、他のリアリズム小説と同様に、実人生や実社会を厳しく冷静に見据える Eliot の視座が垣間見える。

注

1. F. B. Pinion, *A George Eliot Companion* (London: Macmillan, 1981) 126-27.
2. Gordon S. Haight, ed., *The George Eliot Letters*, vol. 3 (New Haven: Yale UP, 1954-78) 41. なお、"The Lifted Veil" については拙論「"The Lifted Veil" における「知ること」の意義」(『英語と英米文学』第35号、2000) 87-104頁を参照されたい。
3. Margaret Harris and Judith Johnston, eds., *The Journals of George Eliot* (Cambridge: Cambridge UP, 1998) 86.
4. *Letters*, vol. 4, 157.
5. この小説が寓話的要素を持つことは、冒頭のエピグラフに La Fontaine の寓話 "The Fox and the Stork" からの警句に満ちた一節が引用されていることにも示されている。
6. Karen B. Mann, *The Language That Makes George Eliot's Fiction* (Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1983) 18-23.
7. John Rignall, ed., *Oxford Reader's Companion to George Eliot* (Oxford: Oxford UP, 2000) 40.
8. George Eliot, "Brother Jacob," *"The Lifted Veil" and "Brother Jacob,"*

ed. Sally Shuttleworth (London Penguin, 2001) 83. 以下の引用は全てこの版に拠り、本文中に頁数のみを記載する。

9. J. S. Szirotny, "Two Confectioners the Reverse of Sweet: The Role of Metaphor in Determining George Eliot's Use of Experience," *Studies in Short Fiction* 21 (1984): 127.
10. Helen Small, introduction, *"The Lifted Veil"・"Brother Jacob,"* by George Eliot (Oxford: Oxford UP, 1999) xxxiii.
11. Sally Lunn が "a sweet, light tea-cake" の名前であるのも、本論のテーマから考えると興味深い事実である。Small, notes, 99.
12. James Diedrick, "George Eliot's Experiments in Fiction: 'Brother Jacob' and the German Novelle," *George Eliot: Critical Assessments*, ed. Stuart Hutchinson, vol. 3 (Mountfield: Helm Information, 1996) 264.
13. 小説の時代設定について、Sally Shuttleworth は1920年台後半か30年台前半、Hellen Small は1920年台であろうと推測している。Sally Shuttleworth, introduction, *"The Lifted Veil" and "Brother Jacob,"* by George Eliot (London Penguin, 2001) xlix. Small, introduction, xxxiii.
14. Peter Allan Dale, "George Eliot's 'Brother Jacob': Fables and the Physiology of Common Life," *George Eliot: Critical Assessments,* ed. Stuart Hutchinson, vol. 3 (Mountfield: Helm Information, 1996) 250. Dale は David の変名 Freely が "laissez-faire" (自由放任主義) に相応のネーミングであるとも述べている。
15. Small, notes, 102.
16. Dale 255.
17. Mann 23.
18. Szirotny 131.
19. Susan de Sola Rodstein, "Sweetness and Dark: George Eliot's 'Brother Jacob,'" *Modern Language Quarterly* 52 (1991): 296.
20. Shuttleworth, introduction, xxxvi.
21. Nancy Henry, *George Eliot and the British Empire* (Cambridge: Cambridge UP, 2002) 10.
22. Shuttleworth, introduction, xxxiv.
23. Rodstein 296.
24. Shuttleworth, introduction, xl-xli.